

## 北村謙次郎の小説シリーズ『或る環境』とその社会的背景

——一九一〇～二〇年代の大連——

韓 玲玲

はじめに

北村謙次郎（一九〇四～八二）は満洲国で活躍した作家である。彼は東京に生まれ、八歳の時に家族とともに満洲の大連に渡った。十年間の植民地生活を送った後、東京に戻り、文学活動を開始した。個人誌『文芸プランニング』の創刊を皮切りに、『作品』『青い花』など多くの雑誌にも寄稿した。

一時期（一九三四～三五）、大連に戻ったこともあるが、再び東京に住み、保田與重郎（一九一〇～八二）や亀井勝一郎（一九〇七～六六）らの雑誌『日本浪漫派』の同人として文壇から注目された。

一九三七年、北村は満洲国首都の新京（現在の長春）に渡り、雑

誌『満洲浪漫』を創刊し、長篇小説『春聯』などを執筆して、満洲国でただ一人の職業作家となった。戦後、児童文学で生計を立てながら、随筆集『北辺慕情記』など満洲に関する多くの作品を書き残した。

北村の文学活動・作品は、戦時の日本知識人の心像を反映すると同時に、満洲の日本語文学および満洲国の文化状況を表すものとして、史料的价值も大きい。しかし、現在、管見の限りでは北村謙次郎についての研究は、筆者の「満洲国における北村謙次郎の創作——「春聯」を中心に<sup>①</sup>」と「雑誌『満洲浪漫』における北村謙次郎の文学理念<sup>②</sup>」の二篇しかない。

ここでは、北村の満洲時代の短篇連作小説『或る環境』を取り上げ、この小説の構成内容、およびその社会的背景を示す歴史的

文献を紹介して、作中人物が異民族に抱いた態度に触れてみたい。

## 一 シリーズの構成

小説シリーズ『或る環境』は後述の十二篇の短篇からなる連作である。全体は北村謙次郎の他の中・長篇小説にも見られる回想風の形式を採用している。同じ体裁で執筆されたのは、長篇小説『春聯』（新潮社、一九四二年三月）と中篇小説「浪曼の頃」（『素通信』十五〜十七号、二〇一三〜一四年、初発表）である。

『或る環境』の各章の発表時期は前後するため、以下のように整理してみる。最初に発表された作品は、『滿洲行政』（一九三九年二月）に掲載された「天守」である。その後、同誌五月号に「餓鬼」が掲載された。この二篇は『新天地』（一九三九年六月）に発表された「鼎座」（『滿洲浪曼』に再掲される際「序章」と改題）と合わせて、初めて「或る環境」というタイトルのもとに、同年七月刊行の『滿洲浪曼』第三輯に再発表された。

その後、「早春」および「青果」は「或る環境」の続篇として『滿洲浪曼』第四輯（一九三九年十二月）に掲載された。そのうち、「早春」はすでに『滿洲行政』（一九三九年十月号）に発表されていた。「青果」は「色鳥」と一緒に『滿蒙』（一九四〇年一月）にも再録された。この「続篇」は、『滿洲浪曼』に掲載された最後の作品

となる。

『滿洲浪曼』の終刊後、北村は『或る環境』シリーズの発表の舞台を『滿蒙』と『滿洲行政』に移した。とりわけ『滿蒙』（一九四〇年一月号）に掲載した「青果と色鳥」は、物語の構成上、『滿洲浪曼』第三輯の「序章」に呼応している。作者はさらに同シリーズの続きとして、「博物教室」（『滿洲行政』一九四〇年四月）、「塔影」（同誌、同年六月）、「十六号の娘」（『新天地』一九四〇年七月）、「つひの栖」（『文藝』一九四〇年八月）などを次々と発表し、連作を充実させていった。とりわけ、一九四〇年八月の「つひの栖」は、「序章」に対応して、実質上『或る環境』シリーズのエピローグとなった。しかし、「つひの栖」の後も、北村は同じシリーズに属する「垣の外」（『滿洲行政』一九四〇年九月）および「舞台」（同、一九四一年一月）を書き継いだ。つまり、二年間にわたって発表された十二篇の短篇が『或る環境』を構成しているのである。

戦後、北村は『或る環境』シリーズを再編成し、一冊の作品集を出そうとしたが、未公刊に終わった。彼の計画した目次は「天守」「早春」「青果」「博物教室」「塔影」「垣の外」「舞台」という七作のみを含めており、末尾には「百四十枚、昭和十四年〜十五年」と記されている<sup>3)</sup>。そのうちの「舞台」は一九四一年一月一日に発表されたものだが、執筆されたのは一九四〇年の秋頃と思われる。つまり、北村は「舞台」の脱稿日付をもってこの物語を終

附表 『或る環境』シリーズの各作の初出

初出題名	初出日付	初出所	再録日付	備考
天守	1939.2	『満洲行政』	1939.7.23	『或る環境』の一部として、『満洲浪漫』第三輯に再録
餓鬼	1939.5	『満洲行政』	1939.7.23	『或る環境』の一部として、『満洲浪漫』第三輯に再録
鼎座	1939.6	『新天地』	1939.7.23	「序章」と改題され、『或る環境』の一部として、『満洲浪漫』第三輯に再録
早春	1939.10	『満洲行政』	1939.12.12	『或る環境』の「続篇」として、「青果」とともに『満洲浪漫』第四輯に再録
青果	1939.12	『満洲浪漫』	1940.1	「青果と色鳥」として『満蒙』に再録
色鳥	1940.1	『満蒙』	—	「青果と色鳥」として『満蒙』に掲載
博物教室	1940.4	『満洲行政』	—	—
塔影	1940.6	『満洲行政』	—	—
十六号の娘	1940.7	『新天地』	—	—
つひの栖	1940.8	『文藝』	—	エピローグの性質
垣の外	1940.9	『満洲行政』	—	—
舞台	1941.1	『満洲行政』	—	—

え、「序章」と「つひの栖」のみならず、「餓鬼」「色鳥」「十六号の娘」をも収録しようとしなかった。しかし、これら五作は、作品の内容と人物の構成から見れば、明らかに『或る環境』シリーズの一部と位置づけられるべきものであるため、この十二作をまとめて『或る環境』シリーズの全構成と見なしたい。そして、その全構成があるからこそ、当時の「環境」の内実が見えてくる。

附表を参照されたい。

「序章」とエピローグの「つひの栖」は、主人公「忠一」の「現在」を描いているが、この間に挟まれる「天守」から「舞台」までの十篇が主人公の少年時代を扱い、主人公の「回想」という形式がとられる。これからは、作中人物の成長過程に沿って、各章を順に並べ、人物の回想内容と当時の社会的背景を照合しながら、作中で描かれた「環境」の客観性を明らかにしたい。

## 二 「序章」における日中作家「座談会」

「序章」は、満洲に住む日本人作家と中国人作家を集めて催される座談会に対する、作家忠一の期待感から筆が起こされる。忠一は体調を崩していたことから物事に対する態度が消極的であるが、中国人作家との交流には異常なほどの関心を寄せていた。しかし、ようやく開かれた座談会では、日本人作家たちの積極的な発言ぶりに対して、中国人作家たちは建前でしか応じていない。そのため、忠一の期待は失望に変わり、再び退嬰的な状態に戻った。そして、彼は、周辺に溢れている「民族」や「国家」などの言葉に縛られる苦しみから、「自分たちと違った環境に育つ人たちへの、大小と定まらぬ、さまざまな感慨が湧き、満洲で過ごした少年時代の「環境」に思いを馳せる。

この座談会に登場するのは、日本人作家、中国人作家、両者間の調整役を務める「或る文化機関」の三者である。「或る文化機関」とは、「満日文化協会」のことだと思われる。同会は一九三三年十二月に設立され、満洲国における様々な文化活動に関わり、大きな役割を果たしている。<sup>5</sup>しかし、「満日文化協会」の介在に忠一が「懸念」を抱くのは、それに対する中国人作家の警戒心を察したからであろう。満洲国の中国文化人は、亡国の悲しみを背負い文筆活動を中断するか、御用文章しか書くことが許されない。始終当局に監視されるため、同会の座談会への出席もやむを得ない。それに対し、忠一をはじめとする多くの満洲在住の日本人は、支配民族として文学という柔軟な方法を通して満洲国の存在を維持しようとする。「侵略者」と「被侵略者」という立場の違いによつて、日中作家の態度にも違いが生まれるので、「文学への情熱、人間への愛と信頼」<sup>6</sup>を通して日中作家間の連帯を築こうとする忠一は小説の世界へ没頭するしかない。

### 三 「天守」における満洲の阿片製造

「天守」は、大連に渡航したばかりの日本人少年の成長と心理的葛藤を描いた作品である。阿片製造場と事務室が一体化した事務所で、忠一は中国人使用人の阿片吸引と阿片の取引を観察し、彼

らに遊んでもらっているうちに、親しみを覚える。一方、学校で民族差別の教育を受けた彼は、中国人と鉢合わせになった時、絶対の道を譲らない。忠一には「彼ら「中国人」に対する親愛と軽蔑との、拭ふべからざる、不思議に混交した経験が積み重ねられ」<sup>7</sup>ていく。

そのような日々の中、天守閣を設けた新しい阿片事務所ができた。「お城のそれと同じ作りのその檣は、白壁、黒瓦屋根、そして棟の両端には金色に光る鯢がとりつけられ」た建物で、それは忠一に「清新な未知の世界の象徴」<sup>8</sup>のようなイメージを抱かせた。年末に忠一は父の代わりに中国人の宴会に出席して、不思議な微笑を湛えた謎の日本人少女に出会い、彼女から天守閣には「面白いものがある」<sup>9</sup>と聞く。しかし、その後、天守閣に登った忠一は「面白いもの」を何一つ見つけることができず、少女の言った「面白いもの」の正体がわからないままに終わる。「天守閣」には二つの意味があると思われる。一つは在満日本人の「郷愁」を表し、もう一つは植民地支配者の「権威」を示しているのだろう。

作中には阿片に関する場面が多く出てくる。たとえば、阿片製造では「いつも辮髪を頭に束ねた于さんが大鍋に棒を突入れ、黒くどろどろする阿片をこねまはしてゐた」<sup>10</sup>り、阿片を吸う場面では「アンペラ敷きの炕の上に赤い毛布が敷かれ、窓の傍に枕が置かれてあつて、肥つた劉さんと痩せた李さんが、代る代るこゝへ

来て阿片を吸った。「中略」彼らは毛布の上に横臥し、笛のやふな煙管をひねくりながら、片手に持った細いピンの先に丸めた阿片の小塊をつけ、何度も何度も豆ランプの焰にかざして柔げてから、馴れた手つきで煙管の火口に詰める」と、子どもの忠一の目に映る。とりわけ、阿片事務所の銀の出納については、「それらの銀貨は一枚づつ重ねて包装し、一本の長い棒にして何本も何本も積み上げられると、事務所の人たちが二人も三人もで近所の銀行へ運んで行つた」と描く。このような詳細な描写は、日本人の満洲での阿片製造をより具体的に例証しており、当時の満洲で創作された小説の中では極めてめずらしいものだろう。

この阿片事務所については『関東局施政三十年史』に詳しい記録がある。同書には、「明治三十九年十月州内居住の一支那人に阿片の輸入製造販売を特許したが、翌四十年日本人一名との共同事業として改めて特許を与へた。此の販売人は当初台湾総督府専売局と特約して同局製造の煙膏を輸入販売する計画を試みた」とある。松原一枝のノンフィクション『大連ダンスホールの夜』によると、その「日本人一名」は石本鎮太郎である。すなわち、『或る環境』の「阿片総局泰永公司の橋口」のモデルだろうと思われる。石本鎮太郎（一八六四〜三三）は高知県生まれ。幼い頃から軍隊に憧れたが、視力に問題があり軍人になることができなかつた。その後、陸軍通訳として日清戦争、日露戦争に従軍した。日本が

台湾を占領した折、彼は台湾の阿片専売局に通訳として勤め、阿片製造が多大な利潤を生むことを知った。一九〇六年、石本は阿片総局の設立について関東都督の大島義昌に提言した。その後、彼は阿片製造専売特許を取得し、莫大な利益を手に入れた。それを資本として商社・銀行・学校・新聞社などの事業を展開し、関東州屈指の実業家となった。

石本が阿片経営で得た収益金は、中央公園・図書館・市営住宅などの公共施設に使われ、その中でもとりわけ「旅大道路」が注目される。それは旅順と大連を結ぶ総長一万七八五メートルの自動車道路であり、当時「旅大南道路」とも呼ばれた。一九二二年から着工し、完成まで三年半、工費一三五万円かかった。また、二回ほど行われた「満蒙独立運動」も、石本の資金援助によるところが大きかった。彼の弟権四郎は第二次満蒙独立運動で戦死した。

北村謙次郎の父享吉は、一九一〇年頃、東京から大連の通信局へ転勤した後、石本の元で勤めるようになった。正確な時期は不詳だが、最初の勤め先がこの石本の阿片事務所であつたことが北村の作品からわかる。

#### 四 植民地の威光——遊園地、松山御殿、果樹園、温泉

「餓鬼」では、忠一の「仕様のない悪たれ小僧であり餓鬼らしい餓鬼の生活」<sup>19</sup> ぶりが描かれる。忠一は阿片事務所に遊びに通わなくなり、中国人使用人に悪戯をしたり、大人の民族差別を真似て、「植民地坊ちゃん」のように威張ったりする。公園に「支那人入るべからず」とあるのを当然のこととして、中国人のことを「無智」で「厚かましい」と思う。一方、「中国人の根強い生活力には勝てない」という母の言葉に影響され、民族差別への「反撥心」も培われている。

この小説では、大連市に住む日本人が中国人を差別する場面が描かれている。たとえば「電車の内部は二つに分けられ、特等の方には日本人が、並等の方には支那人が乗つてゐた」<sup>20</sup> とあり、列を横切つて通行しようとする中国人に平手打ちを食わせたりする。

また、作中の「公園」は、大連市伏見台の高地にある「電気遊園」をモデルとする。同園は一九〇九年に南滿洲鉄道（以下、「満鉄」と略称）によつて創設され、「当初は数箇の塔楼が聳え、施す電燈を以てし、夜に入れば全園のイルミネーション燦として昼を欺く壯観があ」り、後に「温室、花園、音楽堂、動物園、図書館、メリーゴーラウンド、各種の運動設備があり、瀟洒たる芝生、池

水には遊魚あり、殊に園内の桜樹は市内開花の魁として満開の頃には全山花を以て埋められる美観がある」と描写され、「児童の楽天地」といわれる。<sup>21</sup> 作中の公園内にある、忠一がよく通う図書館は、「電気遊園」内にあつた「伏見台図書館」で、満鉄の経営による。<sup>22</sup> 日本人児童のための「遊園」や「図書館」を遠目に眺める中国人児童の惨めな気持ちは想像に難くない。

「餓鬼」に次ぐ「早春」には、M丘（松山台）に引越した忠一の生活が描かれる。本篇において忠一の内面の成長と感情の複雑化が見られる。妹に猩紅熱をうつされて忠一も病気になり、病院に送られる。そこで中国人少女劉玲慶に出会い、彼女が桃の木の下で靴を脱いで足を洗う光景が忠一の印象に残る。

この小説には、大連の小学校で行われた健康診断の場面がある。「医師は忠一の細い腕をとつて脈を見、胸に聴診器を当て、口を開けさせて喉の奥をしらべると、眼を近く寄せて胸や腕の皮膚を丹念に検査した」<sup>23</sup> といった様子で、大連の日本人小学校における医療環境の一面を描いている。

また、作中での病院は、「大連療病院」のことである。大連療病院の前身は一九〇五年に大連軍政署によつて設置された大連医院第二分院であつたが、一九〇六年九月関東都督府の所轄となつた。<sup>24</sup> 当時の院長森脇襄治による一九二一年から一九二七年までの統計を見ると、猩紅熱で大連療病院に入院した日本人は百名を超えた

が、中国人は一九一二年に三名、一九一三年に一名、一九二四年に二名という僅かなものにすぎなかった。<sup>(25)</sup>つまり、大連療病院に入院する中国人は極めて少なかったため、忠一の入院生活は中国人差別とは無縁であるといえる。

本篇の忠一の置かれた新しい生活環境「M丘」は、「松山台」をモデルとする。これは石本鑽太郎の貸下地として、大連市内の「造林地たり果樹園たり」帯は風景も好く高燥なる適良の住宅地なれども新市街計画にも入らざる全く特別の土地<sup>(26)</sup>と記録されている。そこに建てられた石本の豪邸は人々に「松山御殿」と呼ばれる。北村謙次郎の父享吉は当初、石本の阿片事務所で働き、その後、一家ともに松山台に移り住み、石本の経営する果樹園や温泉事業に協力する。少年時代の北村は、そのように石本と深く関わる環境のもとで日々を送っていた。

「早春」に次ぐ「青果」は、果樹園で日々を送った忠一の自我形成を描く。父の雇主橋口の事業が発展したことで、忠一の一家もM丘に家を建てることのできた。橋口は「満蒙独立運動のパトロン」として振る舞い、当時、日本や満洲の様々な志士たちが橋口邸へ出入りする。蒙古伯爵何某の扁額、掛軸などの類が、橋口家ばかりでなく、「忠一の家の座敷にさへ掲げられるやうになつた<sup>(27)</sup>」という箇所は、当時の石本鑽太郎と北村家の生活ぶりを反映する。

興味深いのは、本作に描かれた果樹園の小盗児に与えられた

「私刑」である。「彼らはまづ両腕を後でくゝりつけられ、自転車のタイヤか水道のゴムホースの切れ端しで息がとまるほどひつぱたかれる。涙と洩汗をいつしよくたにして泣き叫ぶのを、昔は船員だつたといふ日本人の山番が、責檻といふより憎悪それ自身のやうな眼を剥いて叩き続け<sup>(28)</sup>」たり、「彼らの辮髪にクールタールを塗りつけ<sup>(29)</sup>」たりした。

「青果」に次ぐ「色鳥」は、深秋の山の谷間の自然風景の描写から始まる。忠一は紅葉谷を通りぬけ、松山寺という中国寺にたどり着き、その寺やその付近の中国人学堂の様子を観察する。その後、彼は温泉に行く。温泉には日本人が多く、忠一は大人たちに囲まれ、温かく迎え入れられる。他方、中学校の入学試験に直面する忠一は進学のストレスから中国文化および中国人に目を向け、周りの環境に興味を持ち始める。「松山寺」は清朝（一六三六～一九一三）の初期に創立され、乾隆帝（一七三六～九九）と宣統帝（一九〇九～一二）の時代に修復された仏寺である。『大連市』によると、この寺院の僧侶は五十年前の四人から一九三〇年現在の一人にまで減っていた。<sup>(30)</sup>寺院の行事としては、毎月一日と十五日の読経、四月十八日の天仙母聖誕日、七月十三日の羅祖聖誕日などがある。<sup>(31)</sup>この寺は今でも巡礼者が多い。

また、温泉とは、松山台にある「松山館」のことである。この温泉は、大連在住の日本人の憩いの場で、文化人の集会などにも

よく利用されたようだ。一九三〇年二月発刊の『満洲短歌』に富田充執筆の記事がある。「一月十九日午前十時から、松山台ラジウム温泉の一室に、みんな集まつて貰ふことにした。当日いろいろ準備もあらうと、定刻より早目に出かけて、「中略」長い廊下を渡つてゆく。冬枯れの庭土に雪の名残りはあはれであるが、地に敷く光りは、なんといつても小春日和である」とある。この時の歌人たちの集まりには、富田充のほか、八木沼丈夫、城所英一、加藤多満喜、河瀬松三、山口慎一（大内隆雄）、上村哲弥、三溝沙美などが出席した。なお同記事は、大内隆雄の『満洲文学二十年』にも引用されている。

「色鳥」に次ぐ「博物教室」は、中学校に入学した忠一を描く。温泉で彼は罐焚きの中国人李曉声と親しくなる。ところが、李の姿もいつしか温泉から消えてしまった。ある日、忠一は街で冷麵を売っている李と再会した。李は忠一に自家製の冷麵をご馳走しようとするが、忠一は受け取らずに逃げてしまった。その頃の忠一少年は、下層階級の中国人の「辛抱強さ」に関心を持ち、素朴な生活に満足する彼らの気質を発見する。その後の数篇では、忠一少年の視線は大連を出て、満洲という地域に広がっていく。

## 五 大連を出る——異民族への目覚め

「塔影」は、中学四年生の忠一と中国人の友人于慶仁とのハルビン旅行を描く。沿線の駅は、昔の修学旅行の訪問地だったので、二人の思い出を誘つて尽きない。奉天では于の案内で劉玲慶（早春）の少女の家を訪ね、長春では列車の中で知り合った人に紹介された長春憲兵隊の宿舎に泊まる。さらにロシア人と中国人の多い車中で一泊した後、ハルビンにたどり着く。忠一の従兄の宿舎で朝食をとった後、彼らはロシア人の多い町を歩き、「塔のある町」に來た喜びを深くかみしめる。

題名「塔影」は「玉葱形の塔の立つハルビンの街の風景」を意味する。「玉葱形の塔」は言うまでもなく、ロシア正教会の聖ソフィア大聖堂を指す。この教会は一九〇七年、ロシア人によつて創建され、現在もハルビンを代表する建築物である。

本篇では忠一たちの旅先における「環境」への対応ぶりがよく描かれる。奉天では、中国人同士の見聞しさに對して忠一は嫉妬し、長春憲兵隊の宿舎で宿泊した時、尺八の音を聴いた于は「日本の音楽つて、みんな悲しいやうな調子ものなんだね」と言う。夜行列車で二人はロシア人青年と交流し、積極的に異民族と接触しようとする気持ちが生まれる。ハルビンで忠一が従兄へ、母から



の土産（手作り甘納豆とグレープジャム）を差し出した時、従兄の顔には忠一の理解できぬ郷愁めいた表情が仄かに漂っていた。

とりわけ、長春駅で東清鉄道に乗り換えるチケットを購入する場面で、日本円ではなく「大洋銭」に両替することも、当時の貨幣使用状況を示す歴史的証言となつている。つまり、満洲国が成立する前、満鉄経営の鉄道路線と附属地では日本円が流通していたが、それ以外の中国東北地域では、地方政権や金融機関が発行する様々な貨幣が流通していた。「大洋銭」もその一種である。したがって、忠一は満鉄終点の長春駅で東清鉄道に乗り換える際、日本円を両替しなければならなかった。

「塔影」の続篇は「十六号の娘」であり、忠一たちのハルビン滞在を描く。電電会社の独身寮に泊まる忠一たちは、従兄の案内でハルビンを観光する。サーカスの観賞、「ソフィスキー寺院」の景物、ヨットでスングリ（松花江）を回つたり、東清クラブでの食事などを通して、ハルビン在住のロシア人と日本人を観察することができた。ロシア人はクラブでサービスマンに従事し、裸踊りで収入を得て、零落した生活を送っている。ロシア人の群れから発散される匂いと笑い声などから「何かしら秩序をもつた一つの渦」を感じ、ハルビンが有する、渾沌としながらも秩序があるその地に強い魅力を感じた。

一方、ほとんどの日本人は家族を内地または「南滿」に残して、

単身赴任している。彼らは普段、クラブで食事し、「オートバイ」を練習し、楽器を学び、ロシア少女と付き合う。ある男は、クラブで十六号の名札を持つロシア少女と交際するが、彼女にほとんど関心を払わず、ハルビンの生活を「つまらない」と言い、日本に戻ることはばかり考えていた。一見、多彩な生活を送っているように見える人々は、実は誰もが「故郷に帰りたい」という思いと、それが叶わぬ悲しみに打ちひしがれているのだった。

「垣の外」では、ハルビンから帰った忠一は、「黄色ルバシカを着て、襟に赤い小さな点の入った黒のネクタイを垂し、飾穴の幾つかあけられたサンダル型の靴を穿いた」<sup>38</sup>姿で通学して、「ハルビンかぶれ」と噂される。受験勉強に専念できない忠一は、自分だけが「完全に垣の外に閉め出された」と感じる。彼は、学校をさぼつて図書館に通うために果樹園の苦力の小屋で時間を潰していた。そこを父に発見されて、激しく衝突する。本篇では、忠一の中に蓄積された植民地制度に対する不満が初めて爆発し、下層中国人に対する同情が明らかにされる。彼は「苦力だつて、人間です。立派な、人間です」と叫び、父と喧嘩する。

「舞台」では、映画館「キネマ」に通う忠一の様子が描かれている。彼は、時には洋画に「無限の郷愁」を喚び起こされ、時には舞台上上つて遊び、「エミグラント」（白系ロシア人）の音楽会を観賞したこともある。そうした刺激を受けるたびに、忠一は創作欲

を刺激され、雑誌の寄稿者になることを夢みた。

「キネマ」とは、洋画専門の映画館「電気館」のことである。当時の大連には映画館が四軒あり、「電気館」は電気遊園の中にあつたため、このように命名された。早川という人物によつて一九二〇年から一九二一年まで運営された。大連唯一の洋画専門館として、『大連市』に「時代は連続大活劇尚ほ華やかなる時代であつたし洋劇専門館として独占的地位を占めてゐたゞけに一部に大きな勢力を持つてゐた」と記録されている。

本篇では、橋口が破産して、忠一の父は住み慣れた住宅を明け渡し、ある古家に引越す。翌年春、忠一は家族と別れて東京に向かつた。本篇は『或る環境』シリーズにおける忠一の少年時代の終章となる。

「つひの栖」は『或る環境』のエピローグとして書かれたものである。満洲文話会の推薦によつて、一九四〇年八月、改造社の『文藝』に発表された。成人した忠一が中国人と同乗した馬車で新京市内から郊外の寛城子に帰るところから始まる。「三不管」という地域の中国人街の様子が生き生きと描写されている。「三不管」とは、東清鉄道の寛城子駅と満鉄の長春駅との間に設けられた、国際的な緩衝地帯だった。山田清三郎の回想録『転向記 嵐の時代』によると、「それは、寛城子のロシアの附属地と、日露戦争に勝つて、南部線をロシアから得た日本の満鉄附属地とのあいだに

予想される紛争をさけるためだった」<sup>(41)</sup> ようだ。「三不管」や「小盗」（こそどろ）など、日本内地では見ることもない満洲風景が本篇の見どころの一つだが、満洲の生活環境、および日本人のこの土地に根付こうとしない生活態度は、作者の批判の対象となつて

いる。時はすでに「序章」の座談会から一年が経過している。その間、妻の妊娠をきっかけに、忠一は転居問題をはじめ、生活条件の改善を求める。だが、新京の住宅難と満洲の生活習慣の違いによつて容易に解決できない。妻を内地に送ろうとも考えたが、結局、正真正銘の「満洲の子」を産もうと決め、不便な満洲生活を続ける。同時に忠一は満洲の日本人の生き方について考える。異民族との付き合いについて、「同等につきあはぬ限り、彼らはすぐ背を向けるのだ」と認識する。

幼い時に満洲に渡つた忠一は、満洲生まれの日本人と比べて、この土地に対する帰属感は強くないが、「日本人であつて満洲国民であることに、何の矛盾も感じない」人物である。いわば、日本に対しても満洲に対しても帰属感が薄い。そのうえ、「国家」「民族」に対して強い反発も抵抗もなく、常に自分を余所者と思う。しかし、間もなく親になる彼は、ようやく自分の居場所を見つげることができた。それは「つひの栖」の意味するところである。そして、「序章」で感じた「苦しみ」は、「満人との融合、風土へ

の同化<sup>(45)</sup>」という理念によって和らげられる。

### 結び

この小説シリーズは、一人の日本人少年の異民族に対する意識が差別から理解に変わるプロセスを描いている。統治者と被統治者の生活環境と生活態度を通して、日本人が満洲の風土に溶け込み、異民族同士の相互理解を可能なものとするところに、北村の理想が見られる。

北村と同時代、満洲では多くの日本文学者を輩出した。たとえば、満洲生まれの吉野治夫（一九〇九〜四八）もいれば、秋原勝二（一九一三〜）や坂井艶司（一九一八〜六六）など北村と同じように幼い頃に満洲に渡った人もいる。彼らは、満洲建国後に渡った日本文学者とは異なっており、それぞれが自分の育った「環境」を持つ。なかでも北村の場合、一時期は「満洲の阿片王」とも称された実業家石本鑽太郎の所有地（松山台）で少年時代を過ごしたことの意味は大きい。

北村謙次郎が満洲体験を文学にしたこのシリーズは、文学史的には忘却されているが、生活環境に関する描写は、当時の日本人社会と中国人社会を如実に示す貴重な歴史的証言であり、異民族に対する彼の理念を反映する代表作と見てよいだろう。

### 注

- (1) 韓玲玲「満洲国における北村謙次郎の創作——「春聯」を中心に」『日本研究』第四十八集、二〇一三年九月。
- (2) 韓玲玲「雑誌『満洲浪曼』における北村謙次郎の文学理念」『総研大文学研究』第十号、二〇一四年三月。
- (3) 北村謙次郎の戦後に残したノート（北村家保存）による。
- (4) 北村謙次郎「或る環境」『満洲浪曼』第三輯、一九三九年七月、一一〇頁。
- (5) 岡村敬二『日満文化協会の歴史——草創期を中心に』（京都ノートルダム女子大学、二〇〇六年）を参照。
- (6) 同注4、一〇四頁。
- (7) 北村謙次郎「天守」『満洲行政』第六卷第二号、一九三九年二月、二六〜二七頁。
- (8) 同右、二六頁。
- (9) 同右、二九頁。
- (10) 同右、二四頁。
- (11) 同右、二四頁。
- (12) 同右、二五頁。
- (13) 関東局編『関東局施政三十年史』関東局、一九三六年、九四三頁。
- (14) 松原一枝『大連ダンスホールの夜』中央公論社、一九九八年、四〇頁。
- (15) 石本鑽太郎の経歴については、伊藤武一郎『満洲十年史』（満洲十年史刊行会、一九一六年）、満洲日報社臨時紳士録編纂部編『満蒙日本人紳士録』（満洲日報社、一九二九年）、黒龍会編『東亜先覚志士記伝』下巻（黒龍会出版部、一九三六年）、竹内憲一編『満洲に渡った一万人』（皓星社、二〇一二年）などを参照。
- (16) 同注13、二七二頁。
- (17) 石本権四郎については、石本鑽太郎著『石本権四郎』（一九三七年十一月、私家版）という本がある。

- (18) 「満蒙独立運動」とは、一九一〇年代の中国の混乱期に、中国東北部と内モンゴル地方を中国から独立させ、日本の支配下に置こうとした日本人有志の謀略活動を指している。この運動は二回ほど行われたが、いずれも失敗に終わった。二回とも、日本陸軍の軍人や大陸浪人の川島浪速らが、清の肅親王やモンゴルの王族と連携して実行したものであるが、石本鑽太郎は資金面でこれに協力している。
- (19) 北村謙次郎「餓鬼」『満洲行政』第六卷第五号、一九三九年五月、二二七頁。
- (20) 同右、一二四〜一二五頁。
- (21) 高橋勇八編『大連市』大陸出版協会、一九三〇年、三二四〜三二五頁。
- (22) 同注13、二二二頁。
- (23) 北村謙次郎「早春」『満洲行政』第六卷第十号、一九三九年十月、二二一頁。
- (24) 大連療病院については、高橋勇八編『大連市』（大陸出版協会、一九三〇年）三五七頁、関東局編『関東局施政三十年史 下』（関東局、一九三六年）九一―頁、関東局衛生課編纂『衛生概観』（関東局、一九三七年）二八〇頁を参照。
- (25) 森脇襄治（一九〇二〜？）は満洲の歌人、大連療病院院長。著書に『羈旅諷詠』（私家版、一九三七年）、『満洲保健雑記』（大阪屋号出版部、一九四五年）などがある。
- (26) 黒井忠一・森脇襄治「流行病学ヨリ観タル猩紅熱」『金沢医科大学十全会雑誌』三十二（十二）、一九二七年十二月。同文によると、猩紅熱の平均死亡率は、日本人は九・二パーセントで、中国人は平均三十パーセントであった。
- (27) 「住宅地開放 地目変換と新利用地」『満洲日日新聞』一九一九年八月三日。
- (28) 北村謙次郎「青果と色鳥」『満蒙』二三七号、一九四〇年一月、一三一頁。
- (29) 同右、一三三頁。
- (30) 同右、一三四頁。
- (31) 同注21、四一〇頁。
- (32) 同右。
- (33) 富田充「歌会記」『満洲短歌』第十号、一九三〇年二月、二六〜二八頁。
- (34) 大内隆雄『満洲文学二十年』国民画報社、一九四四年、九四〜九五頁。
- (35) 北村謙次郎「塔影」『満洲行政』第七卷第六号、一九四〇年六月、二六頁。
- (36) 同右、一三八頁。
- (37) 北村謙次郎「十六号の娘」『新天地』七月号、一九四〇年七月。
- (38) 北村謙次郎「垣の外」『満洲行政』第七卷第九号、一九四〇年九月、一三頁。
- (39) 同右、一一七頁。
- (40) 同注21、五三九頁。
- (41) 山田清三郎「転向記 嵐の時代」理論社、一九五七年、二九頁。
- (42) 北村謙次郎「つひの栖」『文藝』第八卷第八号、一九四〇年八月、二〇頁。
- (43) 同右。